

# 世界短編名作選

## ソビエト編

監修 蔵原惟人



新日本出版社

# 世界短編名作選

## ソビエト編

監修 蔵原 惟人

編集 草鹿 外吉

高橋 勝之

山村 房次

世界短編名作選 ソビエト編

---

1978年5月30日 初版

監修	蔵	原	惟	人
編集	草	鹿	外	吉
	高	橋	勝	之
	山	村	房	次
発行者	松	宮	龍	起

---

郵便番号112 東京都文京区大塚3の3の1

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(945) 8511 (代表)

振替番号 東京 3-13681

印刷 亨有堂印刷 製本 小泉製本

---

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

世界短篇名作選  
ソビエト編  
目次

ポリシエビチカのマリヤ……………	ネウエーロフ／蔵原惟人訳	5
キルギス人チエメルベイ……………	イワーノフ／大野道弘訳	15
コンミューン戦士のパイプ……………	エレンブルグ／蔵原惟人訳	25
早春の芽……………	グラトコフ／小檜山愛子訳	39
塩……………	バーベリ／西尾章二訳	63
初恋について……………	ゴーリキー／蔵原惟人訳	69
はげちよろ家のステパニーダ……………	セイフリーナ／小野理子訳	99
仔馬……………	シヨロホフ／小野理子訳	117
プーシキン……………	ゾーシチエンコ／木村崇訳	127
コプイリヨフの帰郷……………	レオーノフ／和久利誓一訳	133

地 震	.....	ファジエーエフ / 斎藤 勉 訳	149
三番目の息子	.....	プラトリーノフ / 岡林 茱萸 訳	163
姉と弟	.....	フェージン / 法橋 和彦 訳	171
少年パルチザン隊	.....	セラファイモーヴィチ / 黒田 辰男 訳	177
雪	.....	パウストフスキー / 丸山 政男 訳	187
ロシア人気質	.....	A・トルストイ / 大木 昭男 訳	199
ろうそく	.....	シーモノフ / 角 圭子 訳	209
朝	.....	アントーノフ / 松本 忠司 訳	217
白い雨	.....	アイトマートフ / 高橋 啓吉 訳	229
ハバロフスクへ飛ぶ	.....	ルイトヘウ / 飯田 規和 訳	243

四三年の給食	アクションノフ／草鹿外吉	265
十二月の二人	カザコーフ／角圭子	279
敵	カザケーヴィチ／山村房次	291
レーニンの呼びかけ	ベルゴリツ／山村房次	307
解説	草鹿外吉	321

ボ  
リ  
シ  
エ  
ビ  
チ  
カ  
の  
マ  
リ  
ヤ

ネ  
ウ  
エ  
ー  
ロ  
フ  
蔵  
原  
惟  
人  
訳





アレクサンドル・ネウエーロフ

(一八八六～一九三三)

代表作は『ポリシェビチカのマリヤ』(一九二二)、『タシケントはパンの町』(二三)など。

一

われわれのところにもそう言ったのがいた。背のたかい、胸のはった女で、弓のようにね上った、しかもまっ黒い眉をもっていた。ところがその亭主は指貫ゆびぬまくらい、コゾーノックとわれわれは彼を呼んでいた。小汚い——帽子にでもはいつてしまいたいような男である。しかも恐ろしく怒りっぽい。マリヤをどなりつけて、まるで鍛冶屋がハンマーでするように、机をなぐりつける。

「殺すぞ！ 魂をひっこぬいてくれる……」

ところがマリヤはなかなかずるい。びっくりしたような風をして、殊更に彼にいていねいな呼びかけをする。

「プロコフイ・ミトリッチ！ プロコフイ・ミトリッチ！ いったいどうしたっていうのさ、お前さんは？」

「首っ玉をひっこぬいてくれるってことよ！」

彼女はさらにやさしく……

「わたしはきょう粥カシヤをこしらえたんだよ。欲しくない？」

皿にあふれるほど盛って彼にあたえる、その上、バタをいれる、バタの星をつくってやる、うやうやしく立って、結婚式のとぎのように彼を饗応する。

「おたべ、プロコフイ・ミトリッチ、わたしがわるかっ

たんだから……」

彼は得意である、——女が、彼を親切にしているのだから。鼻を上にもかけて、大きい力を感じる。

「欲しかねえ！」

ところがマリヤは女中のように彼につかえる——水をもつてくる、たばこ入れをさがす。小屋のまんなかで靴を脱いでやる。靴を片づけ、靴下を爐いろりの下におしこむ。夜は彼をかかえ、髪をなで、耳もとで猫のような撫声をだしてやる……コゾーノックは彼女をつねるが、彼女は微笑んでいる。

「何だつてお前、プロコフイ・ミトリッチ！ 痛いじゃないか……」

「あたりめえよ、痛えのは……庄いりやうしつめたんだから……」

そしてもう一度つねる——おれは亭主なんでよその百姓じゃないんだと言う。こうして心をやわらげておいて、彼女はそろそろ始める。

「やい、コゾーン、コゾーン！ わたしが二度ばかりなくりつければお前なんぞどこかにすっとんじまう……お前はわたしが木でできてでもいと思ってるのかい？ こんなるくでなしのために苦しむのが口惜しくないと言うのかい？」

以前にはマリヤはその性格をあらわすよりも、より多く自分のなかに家庭上の不愉快をしこんでいた。ところがボリシェビキが自由をもってあらわれて、お前たちは今でも甘い汁をあたえはじめると言っていると、女たちにも甘い汁をあたえはじめると、そこでマリヤは眼をひらいた。何かの弁士がくる——彼女は集会にとんでゆく。まるで恥を忘れたようだ。あるときなど弁士のところに近づいていってまるで娘のように眼で合図をしている。

「同志、家にお茶を飲みにいっちゃい！」

コゾーノックはもちろんそこにいたのだ——つまり眼の前で浮気をしたのである。彼の眼は暗くなった。鼻の孔はまるでガラスびんのようにふくれた。われわれは彼が集会でいきなり彼女をひつつかまえるかと思った。でもとにかくこらえていた。脇腹から近づいていって言う——

「家に行こう！」

ところが彼女は故意でもあるのだろうか……弁士の席にたつてわれわれに演説をはじめた——

「農民諸君！」

われわれはまったく大笑い。そこでコゾーノックももう

勘忍の緒を切らしてしまった。

「弁士さん、その女をひっぱりだして下さい！」

家にかえると拳骨が彼女の上にとんだ。

「魂をひっこ抜いてやる！」

ところがマリヤはばかにしている。

「この家でさわいでいるのは誰だろうね、プロコーフイ・ミトリッチ？ 物すごいけれど恐かありゃしない……」

「貴様がもしも集会になんか行きやがるなら、おれは貴様のスカートを切りはなしてやるぞ！」

「斧の方で言うことをききやしないや」

コゾーノックは激昂して、打つものをさがしている、マリヤは威嚇するように——

「わたしに触れでもしようものなら、——壺をお前の山羊頭にたたきつけてやるから……」

これからはじまったのである。コゾーノックが自分の権力を振りまわせば、マリヤは自分のを振りまわす。コゾーノックが寝台にねれば、マリヤは——暖炉の上に、コゾーノックが彼女のところにくれば、彼女は彼から離れてゆく。

「駄目だよお前さん、今は昔とちがうんだから。お前さんたちにはもう年貢の納め時がきたんだよ……」

「おれのところに来い！」

「いやなこった」

コゾーノックは跳ねまわり跳ねまわるが、しかもそのまま冷たいふとんの中にねなければならぬ。そしてついにこう言うことにまでなってしまった——まったくおかしな話だ！ 彼女は子供を生まなくなってしまったのである。二人生んだ子は——葬ってしまった。コゾーノックは三人目を待っているのだが、マリヤは言うことをきかない。こんなことを言う——わたしはこんな悪戯にはあきあきしちやった。

「どんな悪戯だつて？」

「こんなさ……お前は一度だつて生んだことはない癖に！」

「当り前よ、おれあ——あま、つ、ち、い、じ、や、ね、え、ん、だ」

「じゃわたしだつて、牝牛じゃないんだからね、毎年餓鬼をお前にこしらえてやるなんて。こしらえたくなれば自分で、生むまでさ……」

コゾーノックは逆上する。

「貴様がそんな言葉を言うんなら、おれは貴様の首つ玉を引っこぬいてやる……」

マリヤも負けていない、わたしは不生女うまづめになつたんだと言う。

「どうして不生女なんだ？」

「わたしの血がかわいてしまったのさ……もしお前さんがわたしをしぼって言うんなら——わたしやお前

さんのところからでてゆくばかりだ」

男を袋町におしつめてしまった。前には街で笑談を言ったり、となり近所をあるきまわっていた彼が、これから後というものどこにもゆかないようになってしまった。暖炉の上にもぬる。まるで男やもめのように横たわっている。少年なぐつてやりたいが、そうすると出ていってしまう。そればかりではない。裁判にひっぱりだす。ところがポリンエビキーというやつは必ず男の方に刑罰を宣告する。女を甘やかすことが奴らの流行なんだから。すつかり気ままにさしてやつてもよいが、他人に恥ずかしい、意気地がない、怖気おそけづいたんだ、と言うだろう。二度占い女のところにいったが、何の役にもたない！ マリヤはマリヤで組合のクラブから新聞や書物をひきずりだして来はじめた。テーブルの上に大きな卓布のようにひろげたかと思うと、どこかの女教員か何かのようにすわって、唇をうごかしている。声をだしては読まない。コゾーノックは、もちろん、だまつている。読むならかまわない、ただ家から外にでるな。ときどき殊更に彼女をからかっている——

「電報をさかさまにもつ癖に……：……たいした物読みだ！」

マリヤは見向きもしない。ところが書物とか新聞とかは、よく知られているように人間をすいこんで、まるでちがった人間にになってしまう。マリヤもまたそこまで来たのだ。窓の外に瞳をこらしてながめている。そしてこんなこ

とを言う——ああ退屈だ……

「いったい何がしたいんだ？」

「何だか……ここにもないものが……ちがった生活がしたい」

コゾーノックはなやみになやんだが、とうとう我慢ができなくなってきた。

「おれが一つくらわしてやる、貴様の頭は悪魔につかれて  
いるんだ！ 貴様は余計なことを考えるな……」

ところが彼女は実際、おせっかいを焼くようになってきた。男の仕事にくちばしをいれた。村に集りがあれば、必ず彼女が突立っている。百姓たちは怒りだした。

「マリヤ、シチューでも煮ろ！」

それどころではない！ あちこち眼をくばっている。婦人部とかいうものを考えだした。こんなものは言葉さ

えわれわれはきいたことがない——多分ロシア語ではないのだろう。見てみると、一人の女がやってくる、また他の女がくる、何ということだ！ コゾーノックの小屋で講習がひらかれる。あつまってべちゃくちゃはじめる。ソビエトの政治委員がかれらのところに来はじめた。彼はこの村のものだ。われわれは以前ワシナ・シリャブーノックと呼んでいたが、彼がポリシエビキーの仲間にはいるようになってから——ワッシリー・イワノウィッチにかわった。そこでコゾーノックはもうすっかりおとなしくなってしまう

った。一言でも言おうものなら、十の声で彼にむかってくるのだ。

「さあ、さあ、だまっておいで！」

政治委員はもちろん、女たちの肩をもつ——それが奴のプログラマンなんだ。今じゃ、プロコフイ・ミトリッチ——と彼は言う——婦人をどなることはできないのです——革命ですからね……ところで彼は馬鹿のように笑っているより他ないのである。心ではこんな革命なんかまったくひきさいてやりたいと思いつながら——しかし何だかわい、面白くないことがおこるかもしれない。しかもマリヤはますます手に負えなくなる。わたしはポリシエビキー党にすっかりはいつちまいたいと言う。コゾーノックは彼女を恥ずかしがらせはじめた。お前は恥ずかしくないのか？ と彼は言う、お前には良心がないのか？ でも結局神様はお前のこんな行いをお許しにはならないだろう。マリヤはただ鼻であしらうばかりだ。

「神様だって？ どんな神様さ？ お前はどこからそんなものを考えだしたんだい！」

まるで気持ちがよいようになってしまった。しかも政治委員には何も遠慮しない。彼は彼女にポリシエビキーの書物をもってきて彼女の頭を混乱さす。彼女はただいい気持で満足して顔をあからめているばかりだ。あるとき二人が肩をならべて机にすわっていたことがあった。彼らは小屋の

なかには二人だけだと思っていたのである。ところがコソ  
ーノックは寝台の下にかくれていた——で嫉妬が彼を苦し  
めはじめた。ズックを床までたらし、穴のなかのいたち  
のようにすわっていた。政治委員が言いはじめる——  
「あなたのとこの夫はつまらない男じゃありませんか、同  
志グリシヤギナ。どうしてあなたがあんな男と生活してい  
るんか分りませんな」

マリヤは笑っている。

「わたしはもう四ヶ月もあの人と生活していませんですよ  
……二人のあいだはただ被いだけなんです……」

彼は彼女の——手を取る。

「どうしてそんなことがあるんですか？ わたしはそう  
いうことはいっさい信じないことにしているのです……」  
と言いながら自身は彼女の眼のなかをうかがって、しだ  
いに近く彼女の方に身を寄せる。腰のすこし上の方を抱い  
て、支えている。こんなことを言う——わたしは大変あな  
たに同情しているのです……

コソーノックは寝台の下でこれをきいて、何か気分がわ  
るい時のようになった。二人をうち殺すために斧を取ろう  
としたが——恐ろしい。で頭をズックからつきだして眺め  
る、と彼らは彼をあざわらってこんなことを言う——わた  
したちはお前さんがズックの下にすわっていることを知っ  
てたんだよ……

三

われわれはソビエトの改選をすることになった。女たち  
はまるで市場でもあるように走りまわっていた。われわ  
れがそれについてざわめき、議論していると、マリヤの名  
をさげんでいる声が聞こえてきた——

「マリヤを！ マリヤ・グリシヤギナを！」

誰かわれわれの一人がわざとこう言った——

「お願いしよう！」

皆はふざけているのだと思っていた。ところが気がつい  
て見ると、実際そうなってしまったのである。女たちは、  
鴉のように男たちを突つく——いろんなやめやら、兵隊  
後家やら——まるで雨雲のようだ。しかも村の人たちは役  
目につくのたいていして望まない。ことに今時では——いき  
なり手をふってしまった。マリヤならマリヤでもいい。火  
傷するまでやらして見るさ……

ところでマリヤの投票をかぞえてみた——二百十五票！  
政治委員のワシリー・イワヌイッチは演説で彼女を祝福し  
た。さあマリヤ・フェドロフナ——と彼は言う——あな  
たはわが農民代表ソビエトにおける最初の婦人です。勤務  
について下さい。わたしはソビエト共和国の名をもってあ  
なたのこの地位を祝福し、あなたが労働プロレタリアート

の利益を堅く守られんことを希望します……

マリヤの眼は大きくなり、頬は紅くおおわれた。彼女は笑いもしないでつつ立っている。

「わたしは、できるだけやってみます、タワリーシチー。もしもわたしができないとしてもわたしを責めないで下さい。わたしをたすけて下さい。」

コゾーノックはこの時すっかり気をくざらしてしまった。第一、皆が彼を嘲笑しているのだから尊敬しているのか、彼には分らない。彼は家にかえてきて考える。「これからどういふ風に彼女と話したらいいんだろう？ 何しろお役人だからな」われわれにも何だか変だ！ 何だかいたずらをしているようだ。百姓女がとつぜん——郷ソビエトでわれわれの事をきめるなんて……われわれはおたがいに罵りはじめた——

「ばかな！ こんな役目に百姓女をつけるなんちうことがあるか……」

ナザーロフ爺さんはマリヤに面と向ってこう言った——  
「おいマリヤ、手前の行き場所がちがやしねえか」

だが彼女は頭をふるばかりである——  
「村会がわたしをえらんだんだよ——何もわたしが自分になったんじゃない」

#### 四

あとになってソビエトにいつて、彼女を見るとまるで別人のようだ。机において、インキ壺がある。青と赤の鉛筆が二本ある。側では書記が紙に何か走書きしている。彼女の奴、声までちがった風に作っきていやがる。そして眼まなこを行なに走らせる。

「これは食糧問題についてですか、タワリーシチ・エレメーエフ？」

紙の上に姓を書いて、ふたたびどこかの長官のように

「膳本はできていますか？ 早くして下さいよ！」

われわれはまったく眼を信じられない。これがあのマリヤなのか！ 一度くらい顔をあからめてもよさそうなものだ……われわれに向って誰彼の区別なく「タワリーシチ」呼ばわりする。あるときクリモフ老人がきたところが、彼女は彼にもおなじ言葉だ——

「何かご用ですか、タワリーシチ？」

ところが彼はこの言葉に我慢できなかった——こぶを踏まれるよりもつらい。たとえお前が——と彼は言った——郷の役人でも、おれはお前のタワリーシチじゃねえ……しかしそんなことで彼女をどきまぎさせることができよう

か？ 一月たつと鎗のついた帽子をかぶり、男のルバーシカを着、帽子には星をくつつけた。コゾーノックはなやみになやんで、彼女に離婚を申し入れた。

「こんな生活からおれを自由にしてくれ……おれはもうやりきれない……他のもつと似合いの女をさがす」

ところでマリヤはただ手をふるばかり——

「どうぞッ、わたしはもうとつくに承諾しているんだよ」

五ヶ月のあいだ彼女はわれわれのところまでつとめていたが——しまいには鼻につきだした。と言うのは彼女はひじょうにポリシェビキ一的にふるまったので、他の女たちも彼女から伝染してきた、——彼女が鼻をならすと、他の女も鼻をならすという風で、ある二人の女はすっかり夫から離れてしまった。皆はこういう連中からもうのがれることはできないのだと考えていた。ところがそこに小さなできごとが起つた——コサツク兵が襲撃したのである。——マリヤはポリシェビキたちと馬車にのつてどこかへ行つてしまった。どこに行つたのかわたしは知らない。他の村で誰かが彼女を見たようにも言つていた。がそれは彼女でなくて、誰か彼女に似た他の女だったのかもしれない。この頃はこういう女がやたらに多くなつてきたから。

(一九二一年)



